

パリラリラ

～ パリに行こうよ ～



お気楽、ご気楽なパリ5泊7日の旅。

その記録を、写真とともにつづります。

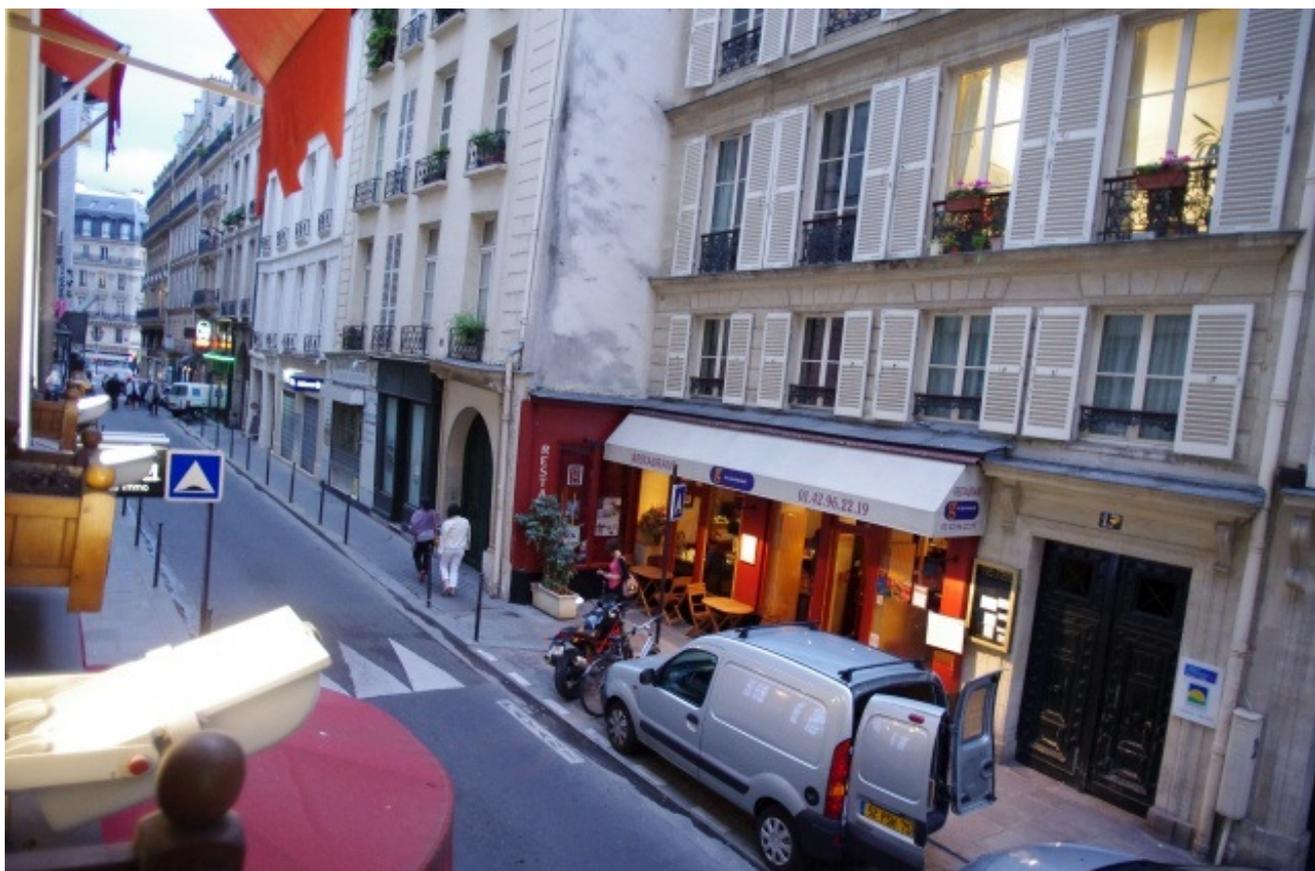


今回の旅は、ルフトハンザ航空を利用。フランクフルト経由でパリへ。

いまやシートごとにモニターを用意するのはめずらしくないけれど
ルフトハンザのいいところは、飛行機に取り付けたカメラの映像を見られること。

しかも、3つのアングルから自分で選べます。

離着陸時、地上を見下ろすのは楽しい。



滞在したホテルの窓から、パチリ。

パリでは、客室数29のプチホテルPavillon Louvre Rivoli に滞在しました。

パリでは、ホテルの立地が快適な旅の要。

多少値段が張っても、中心地に近い場所を選びたいものです。

実際、こちらのホテルはルーブル美術館から徒歩数分、地下鉄駅も近くにあります。

買い物に行って、いったんホテルに戻り、荷物を置いて観光へ、

なんてことも、できてしまいました。



モンマルトルの丘に建つ サクレ・クール寺院。

「サクレ・クール寺院」と呼ばれる教会はフランス語圏にいくつかあるけれど

おそらく一番有名なのは、この教会でしょう。

広く抜けた真っ青な空に、真っ白な寺院の塔が映えます。

振り返れば、目の前にはパリの街がパノラマで広がります。

階段を上るのはつらそうという人も大丈夫。

階段脇には小さなモノレールがあります。

異国にてポケモン発見！



教会は古くから人が集まる場所。
この教会の前にも、楽器を奏でるパフォーマー、談笑するカップル、おみやげ売りなど
あらゆる人が集っていました。
そんな中に、ピカチュウ発見！
まさかこんなところで出会うとは。
パリでも「ポケットモンスター」は人気なんですね。

芸術家が集うテアトル広場



モンマルトルの丘は、芸術家の丘。

かつては、ピカソやロートレック、ユトリロ、ゴッホらも集まったといえます。

彼らの時代とは景色もすっかり変わってしまったでしょうが、

その空気を感じられる場所は残っていました。

ここは、サクレ・クール寺院裏手のテアトル広場。

芸術家たちが集まって作品を売ったり、観光客の似顔絵を描いたりしています。



シャイヨ宮前の広場から見たエッフェル塔。
観光というと、ついその足下まで行ってしまいますが、
その姿を「見る」のが目的なら、この場所がベストスポットです。
私が訪れたときは、ちょうど逆光のタイミング。でも、それが功を奏しました。
エッフェル塔のシンプルなスタイルとそれを形作る複雑な鉄骨、
広場の雰囲気も感じられる、お気に入りの1枚です。

塔に集まる黒山の人



シャイヨ宮前広場の先まで進んで、エッフェル塔前の広場を見下ろした1枚。

噴水と緑の芝生がきれいです。

本来ならば、エッフェル塔に行き、てっぺんまで登りたいところ。

でも、この日は晴天だったためか、エッフェル塔は大混雑でした。

展望台行きのエレベーターは塔の足下にあります。

そのあたりを拡大してみると……黒山の人！

2時間待ちとの情報もあり、今回はあきらめました。



オルセーは、ルーブルについて有名なパリの美術館。
長距離列車のターミナル駅を改造して作ったことでも有名で、
多くの観光客が訪れます。この日もかなり混んでいました。
ただ、中に入ると想像よりもゆったりとした印象。
天井がアーチ型で高く、ガラス張りのため、自然光が差し込むこと、
展示物は空間に余裕を持って配置されていることが、その要因でしょうか。

肝心の展示物かというと…
19世紀末の前衛芸術が中心だからですか、正直難しい。
私はむしろ建物自体を楽しみました。
まっすぐに伸びた中央ホールや壁の大きな時計、
かつての姿を再現した模型など、駅舎だった頃の名残を随所に感じられて
とても面白いと思います。



フランスを旅行する人は、必ず訪れるのではないのでしょうか、ベルサイユ宮殿。

写真は、正面入り口のロイヤルゲート。

門だけ妙に金ピカなのは、仏王の威光によるものではなく、新しいものだからです。

フランス革命で壊され、2008年に修復されました。

なお、ベルサイユは西南約20km。パリ市内からは電車で40分程度です。

ただ、電車の本数が少ないので、思いの外、交通の便は悪い。

オプションツアーなどに参加して、バスで連れて行ったもらうのも手です。

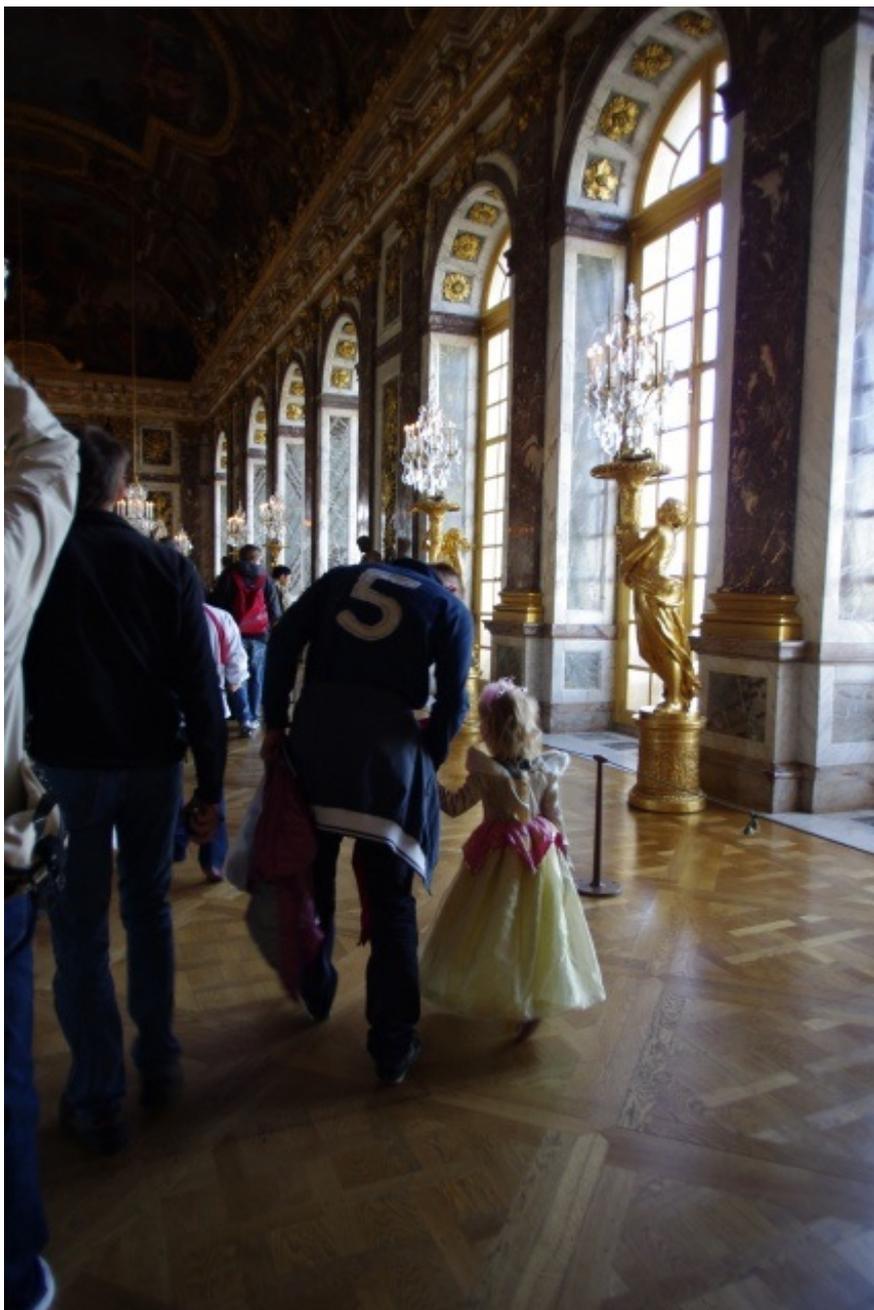


ベルサイユの一番の見所、鏡の間。
かつてはたくさんの銀製品が飾られていたそうですから
もったきらきらしていたんでしょうね。

ところで、ベルサイユは10年ぶり2度目の訪問だったのですが、
その感想は「あれ、こんなにびかびかしてたっけ？」。
前回は鏡が曇っていて、いかにも“寂れた栄華”という空気を感じた記憶があります。
あとで調べてみたら、ロイヤルゲート同様、こちらも2007年に修復が完了していました。
約20億円をかけ、痛んでいた鏡を交換、天井画も修復したとか。
なるほど、きれいになったはずですね。



ベルサイユの見所からもう一つ、王の寢室。
ブロケード織りと金箔をあしらったインテリア、ふさふさのついたベッドなど
これでもか！というほど豪華。
ただ、ベッド自体は思ったより小さい印象でした。



ベルサイユ宮殿の鏡の間で、小さな姫に遭遇しました。
手を引く人はパパでしょう。
ややお疲れ気味でむくれる姫に気を遣っているようでした。



ベルサイユ宮殿を出たら、すぐそばのPlace du Marché Notre-Dameという広場へ。
ここには、生鮮食品からお総菜、石けんなどの雑貨まで売っているマルシェ（市場）があります。
パリの中心地にもマルシェはありますが、いずれも規模の小さいものばかり。
マルシェの活気を味わうなら、ぜひこちらをおすすめします。
果物を買ってホテルに持ち帰るもよし、その場でポテトやチキンなどのお総菜をほおぼるもよし。
蜂蜜や石けん、フォアグラの缶詰なども格安ですから、おみやげ調達にも便利です。
私は友人たちに石けん（約2ユーロ）を買って帰ったところ、大好評でした。



ベルサイユ宮殿と並んで、フランスに来たら訪れるのがルーブル美術館。
宮殿だった建物の真ん中にこのピラミッドは、いつ見ても不思議です。
この日は訪問者も多く、大行列でした。



ルーブル美術館の館内は、フラッシュさえたかなければ撮影自由です。

こういう美術館に来てつくづく思うのは、実物の力。

教科書や美術書では構図は見られても、その大きさや正確な色は分かりません。
額縁まで含めて、その絵とその絵がある空間を味わうことで、まったく違う絵に見えます。

偶然、絵に差した光が絵の印象をがらりと変えてしまう場合もあります。

ジェリコーの「メデューズ号の筏」とドラクロワの「民衆を導く自由の女神」を
並べてみられるのも、つくづく贅沢だと思いました。

ルーブルというと美術品ばかりに目がいきますが、元々は宮殿だけあって、壁や天井も見物。

忘れずに、キョロキョロしてください。



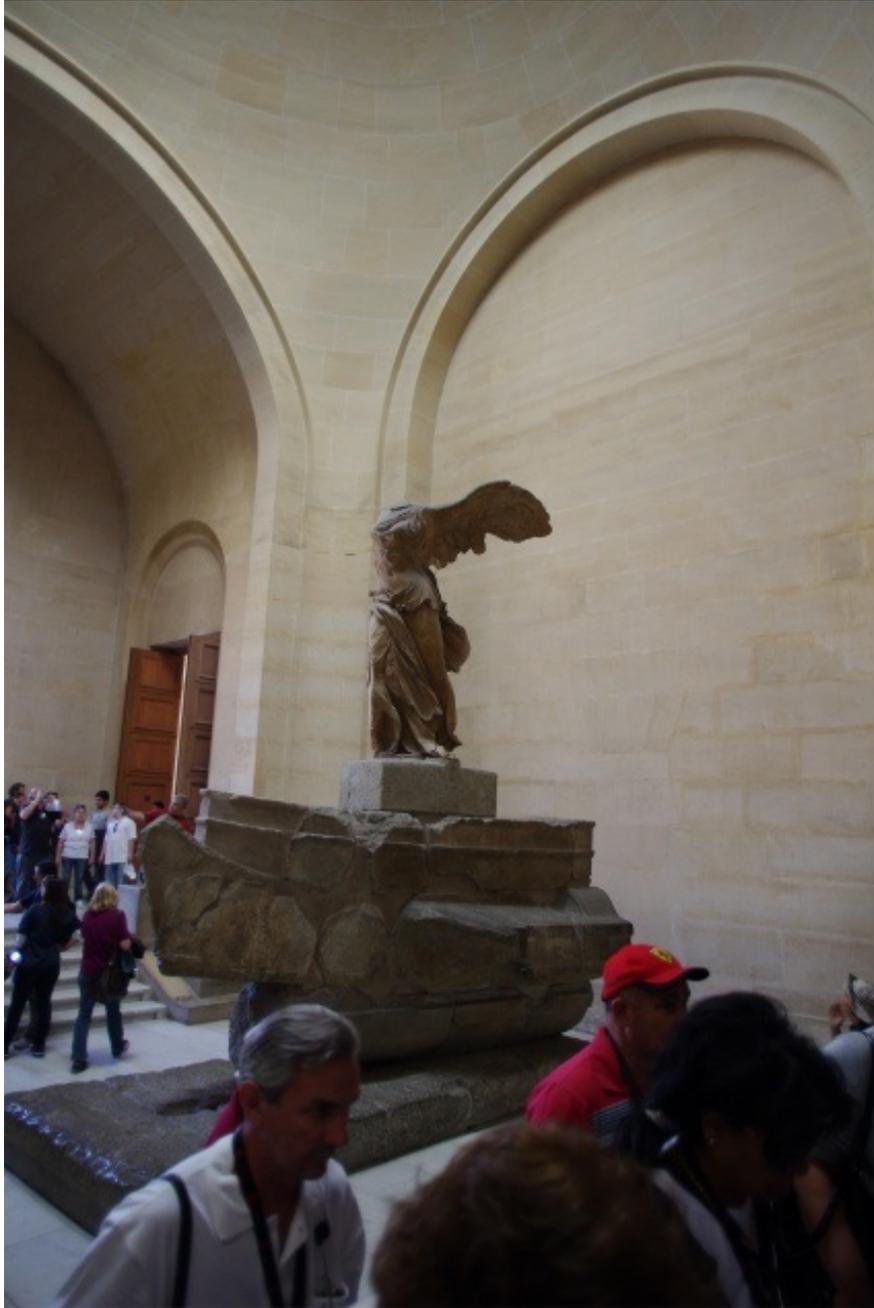
世界で最も有名な絵は、おそらくダヴィンチの「モナ・リザ」でしょうね。
大変なにぎわいでした。

以前来たときはほかの絵と並んで壁に展示されていたと思うのですが、
人が集まりすぎると、隣の絵が見えなくなってしまうせいでしょうか。

別に壁が作られ、モナ・リザだけ収められていました。

ちなみに、笑顔認識機能を備えたデジカメを持っていた友人がカメラを向けたところ、
一瞬ですがモナ・リザの笑顔が認識されたとか。
やっぱり笑っているんですね。

これが絶対見たかった



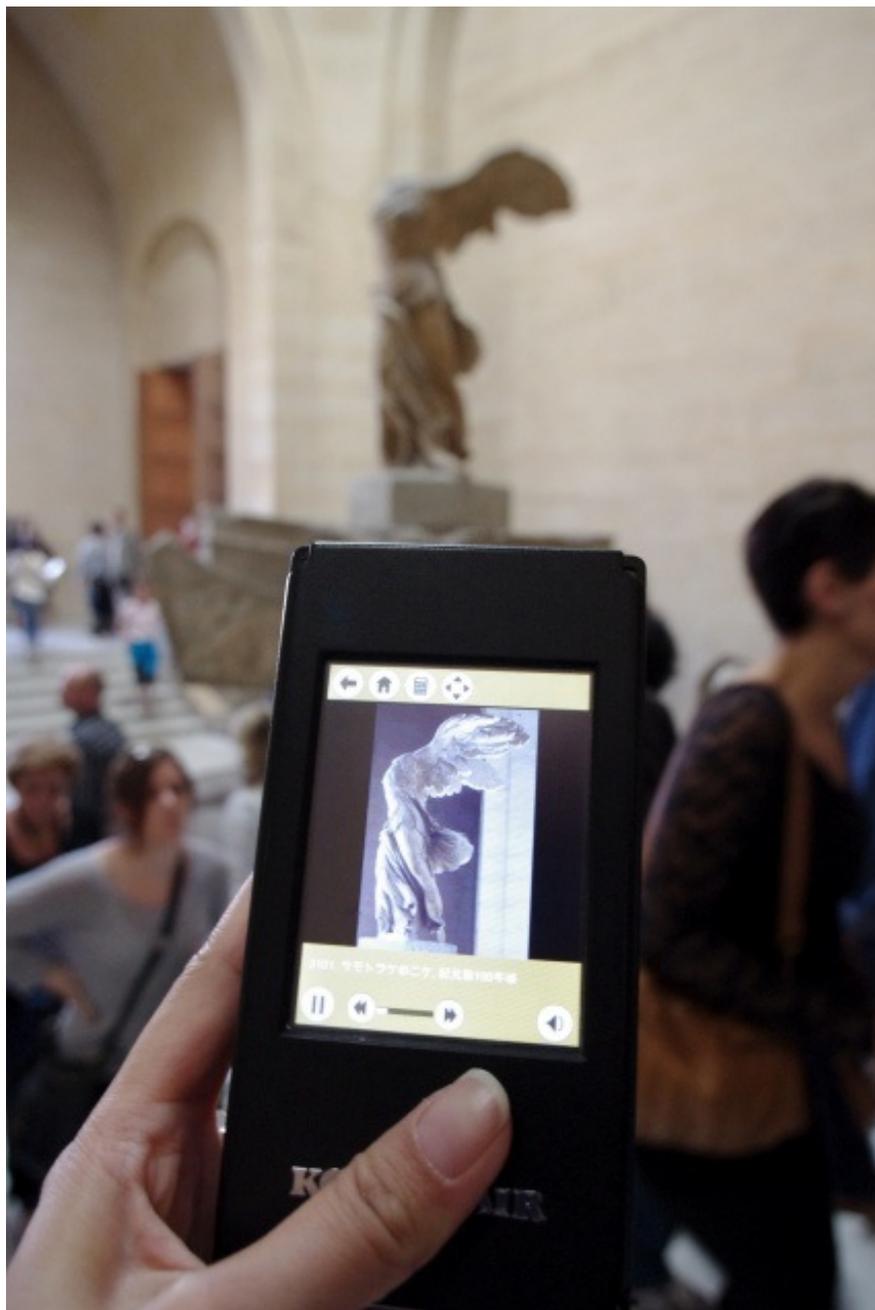
出ました！「サモトラケのニケ」です。

実は、ルーブルの展示物で私が一番好きなのが、サモトラケのニケ。

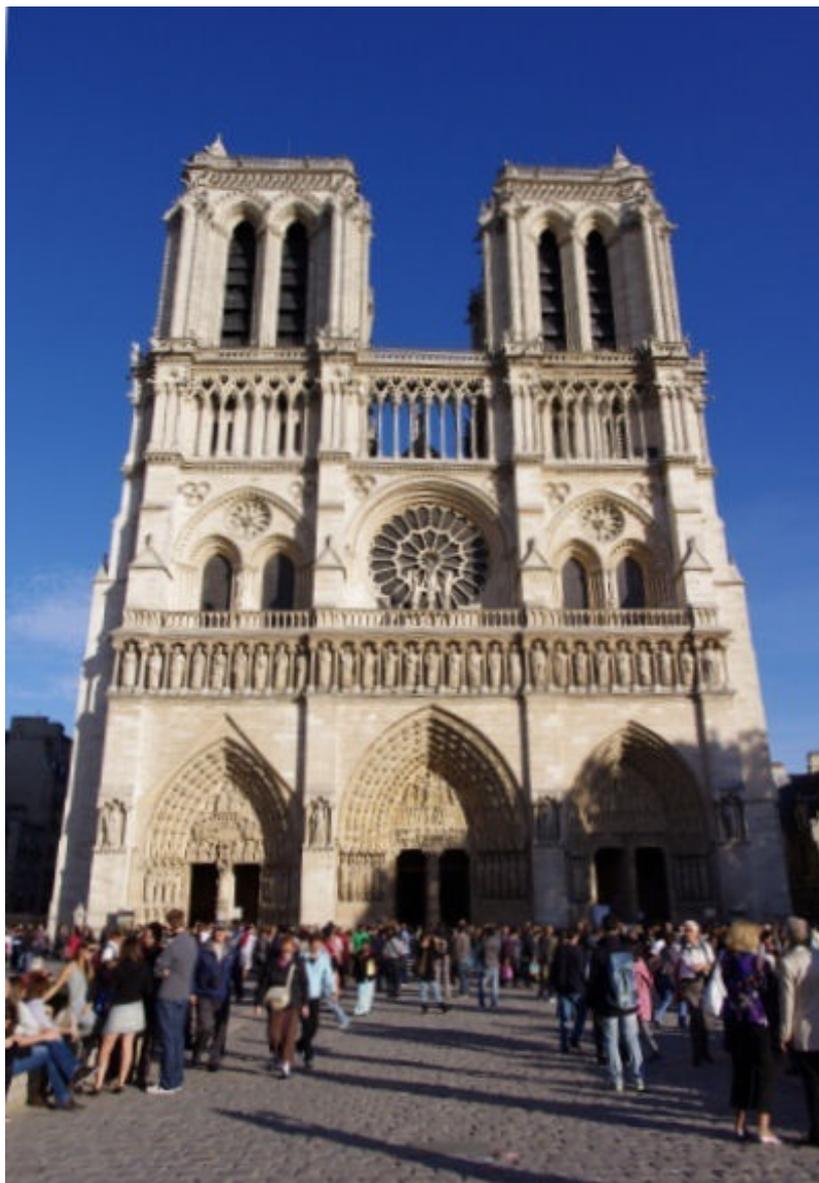
その造形の美しさもさることながら、展示場所も素晴らしいのです。

階段の踊り場に、階段を見下ろすように置かれ、上からは天窓の光が差し込む。

写真などでは分からない、厳かな美しさを感じられて、ほれほれしますよ。



約10年ぶりにルーブルを訪れて、感心したのがこのガイドです。
各国版が用意しており、その展示物の説明を音声で聞くことができます。それもかなり詳しい。
展示物を地図から探せるのも便利です。
料金は確か6ユーロ。デポジットでパスポートを預けさせられるのには驚きましたが。
なお、Presented by KOREAN AIRでした。



パリのノートルダム大聖堂。ヴィクトル・ユーゴーの小説でも有名なあそこです。

それにしても、この大きさと荘厳さには圧倒されます。

こういうものを見ると、やはり信仰の力、その上に経つ教会の権威というものを
改めて実感する。

ヨーロッパではよくある経験です。



ノートルダム大聖堂の中では、ミサの真っ最中でした。
ミサ中でも、見学させてくれるんですね。音を立てずに進みます。
中に入ると、外から見たのとはまた別の美しさがあります。
特に、バラ窓のステンドグラスが美しい。
それにしても、これだけ大きな教会の神父って、どんな人なのでしょう。



こちらがシャンゼリゼ通りから凱旋門の下へと抜ける地下道の入り口。

ただし、注意が必要です。

地下道があるのは、凱旋門に向かって右側の歩道の終点。左側の歩道にはありません。

かつて私は左の歩道を歩いていたために、地下道があることに気付かず、凱旋門を取り囲むあの交通量の多い道路を走って渡ったことがあります。

クラクションを鳴らされながら。

はずかしい、若気の至りです。



パリのもう一つの象徴的建築物、凱旋門。

いつ来ても驚くのは、凱旋門をぐるりと囲む道の交通量の多さです。

円形なのに、石畳なのに、車線もめちゃくちゃに、車がすごいスピードで通り過ぎます。

パリに住んでいてもこの道に不慣れな人は、脇道に抜け出すタイミングがつかめず

何周もぐるぐる回ってしまうそうです。

地下道をくぐれば、この道を越えて凱旋門の下に出られます。



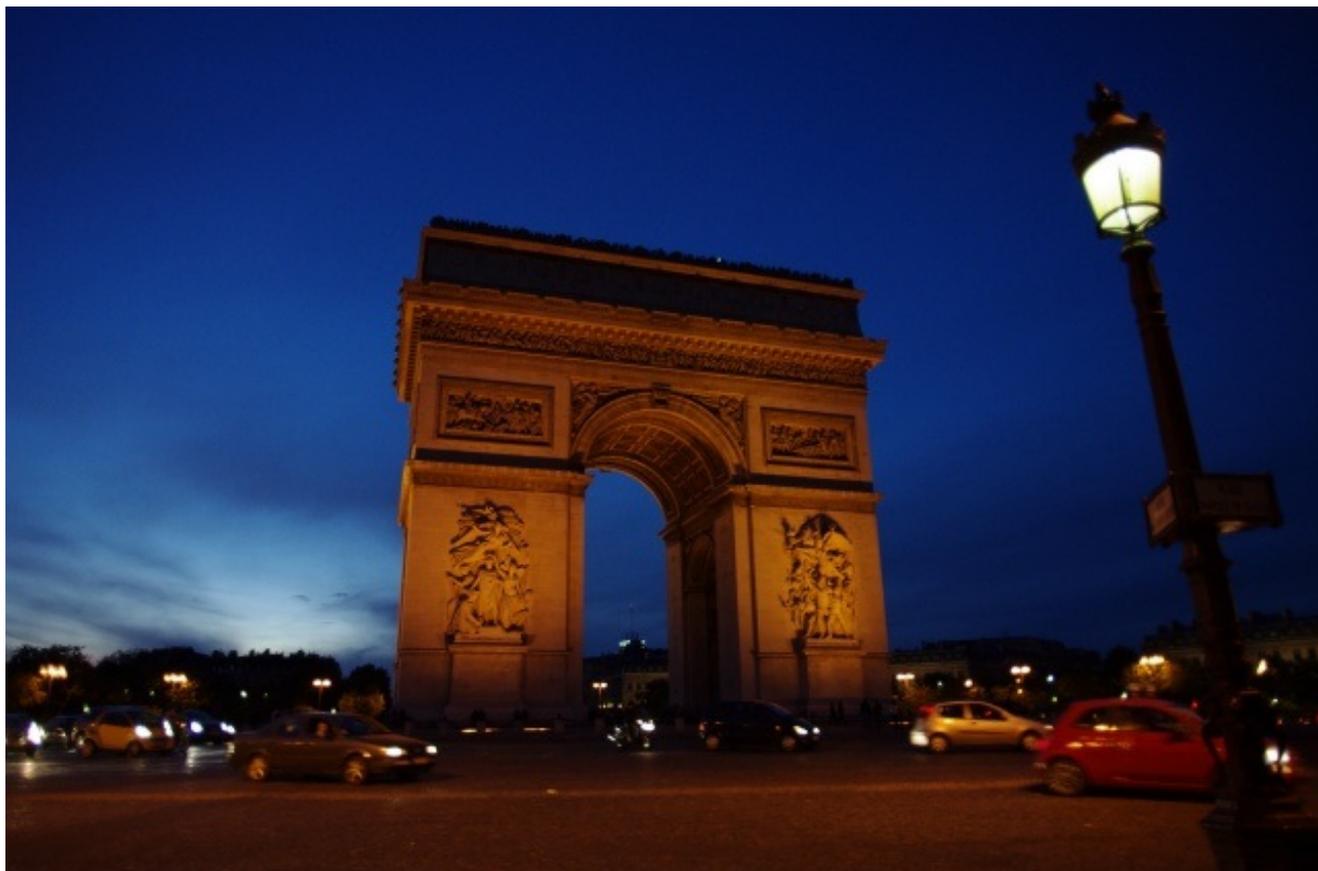
凱旋門は、外から見上げるだけでなく、上ることもできます。
凱旋門の内部に作られた螺旋階段をひたすら上って、上って、上ります。

気付かぬうちに、全員無言。

ただし、登り切った後の眺めは上々。

凱旋門を中心に放射状に広がる何本もの道と、その中心をまっすぐ走るシャンゼリゼ通り、
エッフェル塔なども見渡すことができます。
その景色はぜひご自分でお確かめください。

夜の凱旋門



凱旋門を下りると、もう日は暮れかけていました。
ライトアップされた凱旋門は、昼間とは違う趣。
これは現代だからこそ。凱旋門を作らせたナポレオンも見られなかった景色でしょう。



最終日は、パリで有名というステーキハウス「Les Relais de l'Entrecote」に行きました。

こちらは、「フランス語がまったく分からない」という人にこそおすすめです。

なぜなら、まったく会話が必要ないから。

席について聞かれるのは、お肉の焼き具合だけ。

ウェルダン、ミディアム、レアだけ答えられれば、問題ありません。

最初、出てくるお肉は半分。残りはそばのテーブルの銀皿で暖められています。

半分を食べ終わる頃になると、いかにもベテランというおばさまウエイトレスが

すつとやってきて、残りを乗せてくれる。

表情こそ無愛想ですが、行き届いたサービス、おいしいお料理に大満足です。

あとがき

パリを訪れたのは、10年前の学生旅行以来、今回で2度目。季節は9月、本格的に寒くなる前のちょうどいい季節でした（滞在中の私の服装は右のような感じ）。

前回の旅と大きく違うのは、思わぬ“相棒”ができたこと。それが、デジタル一眼レフカメラです。PENTAXの「K-x」（色は赤）に「DA15mmF4ED AL Limited」というレンズを付けて持ち歩きました。このレンズ、薄型ながら、35mmフィルム換算で23mm相当という超広角。目の前に大きな建物がドン！と広がるヨーロッパ旅行には最適でした。自分の目で景色をながめた後、ファインダー越しにパリの街をのぞいてみると、肉眼とは違う、新鮮な発見があります。太陽の光も手伝って、キラキラと輝いても見えました。万国共通、老若男女、すべての人にとって、カメラが“旅の友”である理由を改めて認識した気がします。

そんな気持ちを残したくて、こんな本を作ってみました。読んでくださった方の何人かが、旅に出てみよう、カメラを持ってでかけよう思ってくださいたら幸いです。

